

開成中では全員が ピアノを弾いている！



開成中学・高等学校の校舎には「ペンと剣」。

(1) 創作を兼ねたピアノ指導

ハーバード、イエール、スタンフォード、MIT・・・アメリカの大学には主専攻以外に音楽を学ぶ学生がいる。音楽をリベラルアーツ（教養科目）として学ぶ環境が整っており、ピアノやアンサンブルに励んでいる学生も多い。

（参照：『アメリカの大学にはなぜ音楽学科があるのか』 http://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/2012/06/08_14291.html）

実は日本の名門校にも授業でピアノを学ぶ学校がある。それはなんと開成中学・高等学校！開成といえば東大合格者数第1位を誇り、日本最高峰の中高一貫校として知られる。その彼らが授業でピアノを弾いているという。今回現役生のお母様でピティナ正会員の熊谷麻里先生のお力添えにより、校長の柳沢幸雄先生、音楽専任の小鮎勝博先生、中学教務委員長の渡辺信幸先生への取材が実現した。開成ではどのような音楽の授業を行っているのだろうか？

●開成のピアノ授業とは？～中学校編

全国有数の進学校である開成の生徒が、授業でピアノを弾いている。しかも25年前から！これはあまり知られていない事実ではないだろうか。「世間では開成は進学校だから受験勉強に関係する科目に力を入れているイメージがあるようですが、実際には芸術にも強いです。美術や音楽で東京芸術大学に進学する人もいます」と校長の柳沢幸雄先生は柔らかい笑顔で語る。

実際にどのような授業を行っているのだろうか。今回、音楽専任の小鮎先生に詳しくお話を伺った。

「授業は創作指導も兼ねたピアノ指導です。ですからモーツァルトやベートーヴェンといったレパートリーではなく、コードネームを見て左手で和音が弾ける、アルペジオの伴奏形を自分で考えて弾けることを目的にしています」。

演奏と創作を想定したカリキュラムは、第1回目からユニークだ。

「まず中学1年生の1学期には、最初の3回を使って校歌を教えます。そのうち1回は歌詞の説明で、1番は地理的環境、2番は明治維新後の開成創立に至る歴史、3番は開成の教育理念（「ペンと剣より強し」「質実剛健」）と、開成の生徒としていかに生きるべきかが全て入っています。さらにもう1回を使って校歌の写譜を行います。楽譜の書き方を覚えるのが目的で、事前に音符・休符の書き方、強弱記号、音価などを教えておきます」。

校歌を写譜して記譜法を学び、4回目からは音階や和音の転回形などを学んでい



左より) 渡辺先生、柳澤校長先生、小鮎先生。渡辺先生は「学園説明会では、開成は五教科だけでなく多岐にわたって力を入れていることを紹介しています」。



教材は小鮎先生オリジナル。

く。テキストは小鮎先生の手作りで（右画像）、中1の1学期で和音の構成要素がおおよそ習得できるようになっている。なかなかハイペースである！

「和音が理解できるようになったところで、『河は呼んでいる』（1学期）、『ドナドナ』（2学期）、ジブリの曲『君をのせて』（3学期）を伴奏付きで演奏させます。初めてピアノに触れる生徒を基準に授業をしているので、演奏レベルは様々です。すらすら弾けてしまう生徒には、2曲目として転調や指の動きが多い『アンパンマン』などを与えています。ピアノを習っていた生徒はそれでも飽き足りないのので、別途クラシックの曲や自分の好きな曲を弾かせることもあります」。

中2からいよいよ創作の一步を踏み出すが、その前の基礎固めとしてバッハのメヌエットを全員必修で学ぶ（1学期）。

「バッハの小フーガの鑑賞をした後、メヌエットに取り組みます。またそれを4/4拍子でジャズ風にアレンジした『ラバーズ・コンチェルト』も、右手でバッハのメロディを弾きながら、コードを見て左手で伴奏をつけて曲を完成させます。さらに2学期にはこれまで教えてきた理論を踏まえて自分で曲を作り、最後のテストでそれを弾いてもらいます。二部形式の曲を書くことが最低条件なのですが、皆それなりの作品を作っていますね。特に小さい頃からピアノを習っている子は、オリジナリティあふれる曲を作ってくることもあります」。

どのような作品が生まれてくるのだろうか、とても興味深い。音楽の授業は週2時間で、楽典を小鮎先生、ピアノを高木誠先生が教え、3年次になると楽器をギターに持ち替えてさらに民族音楽などにも触れていくそうだ。このハイペースな中学3年間の学習成果は、高校でどう生かされるのだろうか？

●開成のピアノ授業とは？～高校編

開成高校でも一般校と同じく、音楽は選択科目となる（音楽・美術・書道・工芸の中から1科目を選択）。音楽を選択した生徒はさらに4つの専門コース（歌唱、ピアノ、ギター、作曲）から1つを選ぶ。いずれも専門の教員が担当する。

小鮎先生が教えている作曲専門コースは20名ほど履修しているそうだが、さすが中学3年間の積み重ねは半端ではない。テキストには芸大でも使われている『和声一理論と実習』（島岡譲著）を用い、四声体の和声を学んで作曲を行う。毎学期末には作品を発表しなくてはならないため、生徒も必死である。そして1年次最後の授業は「自由と規則、あるいはドビュッシー」で締めくくられる。その心は？

「ドビュッシーは古典的な和声学の基本から勉強し、ローマ大賞を受賞してローマに留学したほど完璧に身につけておきながら、全てぶち壊してあのような和声を作りだしました。たとえば禁則である連続五度をピアノの響きの美しさとして使っています。自由とは最初から何をしてもいいのではなく、ルールや伝統を学んで完全に身につけた上で初めて手に入るもの。これは人間の生き方そのものだという事です。」

最後の授業では、人生論にまで結びつくような創造の奥義が明かされる。かつて音楽の授業は鑑賞とコールキューブングンのみで、あまり興味が持てないままの生徒も多かったそうだが、今は皆一生懸命取り組んでいるという。試験の平均点もぐんと上がったそうだ。ただ1年間で授業が終わるため、コマ数が限られている現状ではその先に進めないのが目下の悩み。それだけ潜在能力を持った生徒が多く、また小鮎先生の情熱にも限りはない。（高2は高校からの編入生のための授業になる）

◎校歌：昭和10年に創られた校歌。作曲は信時潔で、1000曲ほど書かれた校歌のうち30曲目くらい。5月の運動会、秋のマラソン大会、卒業式に全校で歌う。



ふたを開めると机代わりになるヤマハ製電子ピアノを使用。ヘッドフォンがあるので全員違う曲に取り組むことができる。



後方左より)福田ビティナ専務理事、熊谷麻理先生も同席。熊谷先生の息子さん(高2)は、部活動で中1から軟式野球部とジャグリング部に所属しているそうだ。

(2) 音楽を学ぶ効果とは？

開成では、ピアノを用いた音楽の授業が25年前も前から行われている。それは一人の音楽教員による改革から始まった。授業時間数を週1時間から2時間に増やし、演奏と創作を結びつけるためにピアノとギターを導入。生徒の熱意も年々高まっているようだ。「音楽は脳に良い影響を与えるのか」という問いかけがよくあるが、ピアノを学んだことのある新入生の割合からも、答えは自然に導き出せそうである。グローバル化社会の中で音楽を学ぶ意味についてもお話頂いた。

●そもそもなぜピアノを？25年前の改革から始まった

では、いつからこのような音楽の授業が始まったのだろうか？それは小鮎先生が音楽教員に着任した1970年代にさかのぼる。小鮎先生は開成高校卒業後、東京芸大に進学して楽理を専攻。卒業後に恩師に呼ばれ、教員として母校に戻ってきた。ある思いを抱いて。

「自分自身も開成で音楽を教わっていましたが、当時は五教科には力を入れ、他は形だけという授業でした。特に器楽教育が足りなかったので、何とか変えたいと思っていました」。

そこで教員3年目にリコーダーを取り入れたが、チューニングが難しく合奏ができないという理由で断念。それを機に、生徒の資質をより生かせる授業をしようと決意した。

「開成の生徒は理論的な思考が得意なので、よく聞いて理解してくれます。そこで音楽の理論と、それをもとにした創作（作曲）の授業をしようと考えたのです。伴奏付きの創作をするためには和音が出せる楽器が必要ということで、中1～2はピアノ、中3はギターを取り入れることにしました」。

当時は安くて88鍵あるピアノがなかったため、60鍵の小さい卓上型キーボードを購入した。同時に、授業時間数も見直した。当時の一般公立中学校での音楽授業は1年生2時間－2年生2時間－3年生1時間（2-2-1）だったが、開成では1-1-1と少なかったのだ。

「音楽を教え始めてから数年経った頃、やはり週1時間では何もできないと感じ、学校側に主張して2-1-1にしてもらいました。およそ25年前です。週2時間に増枠されたので使える時間は約3倍になり、これだけの授業ができるようになったのです。その後、他の公立中ではゆとり教育のため1.3-1-1に減らされましたが、開成は今でもこの授業時間数を保っています」。



●新入生の40%がピアノ学習経験あり！音楽を学ぶ効果とは

ところで小鮎先生は毎年新入生対象にアンケートを行っているそうだが、そこにはある傾向が見られるという。

「新入生の約40%は『ピアノを習ったことがある』と答えています。我々の学生時代は50人学級に1人か2人くらいでしたが、今は10人中4人です」。

中1の40%がピアノ学習経験者とは！ピアノを習う男子が増えたとはいえ、これは驚くべき数字である。熊谷麻里先生は「開成に入ってからピアノを始めた子が、すごく楽しくて好きになったという話をよく聞きますね。なんで今までやらせてくれなかったの？とご両親に言ったという話も。教育熱心な方が多いので、皆さんすぐにピアノを買って習いに行っていたようです。我が家でも息子にピアノや楽典を少し教えたことがありましたが、次の週には『友達にも教えてあげたよ』とっていました」。

楽しいだけでなく、授業内容の難易度も高い。熊谷先生も、中1では普通勉強しないような音程の問題が出ることに驚いたようだ。小鮎先生は「楽典の勉強は大変だと思われがちですが、開成の生徒は理解力があるから、音程や音階にしても順を追って説明すれば分かるようになります。音楽は、数学でいえば足し算のようなもの。掛け算も割り算もルートもありませ

ん。生徒はそれ以上に難しい数学の問題を解いているわけですから・・・!」。

実際、開成には高度なピアノ演奏能力をもつ生徒もいる。現役生の角野隼斗さん(高3・2005年Jr.G級金賞)は、小学校時代からその演奏力の高さが全国的に知られていた。開成では音楽部で合唱の伴奏をしたり、バンド活動もしているそうだ。また同学年の三原真之さんもかなりの腕前で、所属するオーケストラ部ではグリーグのピアノ協奏曲も弾いたという。卒業生にもセミプロ級の方が何人もいるそうだ。ピアノの授業を担当している高木誠先生は、開成の卒業生を集めたコンサート「KP-1」(Kaisei Piano '1 Koukai)を年2回開催している。出演者は元生徒で、東大医学部卒の医者(江里俊樹氏)や東大法学部出身の弁護士(配島啓介氏)など、錚々たるメンバーである。高木先生ご自身も鑑賞の授業で1年間全て異なるレパートリーを暗譜で弾いたり、ショパン全曲をコンサートで演奏したりと、エピソードには事欠かないようだ。

なぜ開成生には音楽的にも優れた能力をもつ人が多いのか。音楽が脳に及ぼす作用に関して近年研究が進んでいるが、小鮎先生もそのような効果があるのではと指摘する。

「才能があるから音楽ができるのか、小さい頃から音楽をやっていたから他の勉強にも良い影響を与えているのか。ある程度は音楽が人間の脳にいい効果を与えていると思っています。だからこそ小さい頃からピアノをやっていた子が、塾に通い勉強もできるようになって開成に合格した、それがこの40%だと思っています。神経学的には、数学など概念的な能力は脳の新皮質で行われ、音楽は旧皮質や脳幹の方に作用すると言われていますが、全体がバランスよく働き、脳のあらゆる部分がお互いに影響を与えあう、それが良い状態だと思います。音楽は脳に思考能力をつけるわけではないが、何らか思考能力をよくするために作用していると、いつか科学的に証明されるのではないかと思います」。

●グローバル社会の中で求められる力

近年日本の教育業界においてもグローバル化が進み、国際バカロレア認定校の増加、英語教育の低学年化、教養教育の強化などが図られている。また海外の大学学部進学を目指す高校生も増え、開成も例外ではないそうだ。そんなグローバル化する社会の中で、あらためて、音楽とはどのような位置づけで捉えられていくのだろうか。かつてハーバード大学教授を務め、ベストティーチャーに選ばれたこともある校長の柳澤幸雄先生にお伺いした。

「芸は身を助けるというように、特に文化的背景の違う社会で生きる時、音楽やジャグリング、マジックなど、言葉がなくても皆が楽しめるものを身につけていることはとても大事です。ハーバード大学院歯学部留学した開成卒業生がいましたが、開成時代はずっとバンドをしていて、英語も特にできたわけではなかった。ところが彼は留学後すぐに地域のオーケストラに入り、3か月後には上手な英語をしゃべっていましたね。楽器一つで人生が変わります。彼は今UCLAの歯学部教授で(Dr.Ichiro Nishimura)、インプラントの世界的権威です」。

柳澤先生ご自身もボストン交響楽団の演奏会によく聞きに行ったそうだが、楽器という特技をもっていた彼(西村教授)を羨ましく思った、とも語って下さった。(※UCLAの西村教授紹介ページには、熱心なコントラバス奏者だと記されている。)

音楽という誰もが共有できるものを持つことで、世界は大きく開かれていく。さらに文化背景の異なる場でも実力を発揮できるのは、音楽という素養に加え、学生生活の中で自然に自主性や創造力が育てられているからだろう。「学校教育のゴールとしては学生が『将来自分はこういうことをしたいから、どうしたらいいですか』と質問しにくくなるようになること。それに対して我々は『こうしたらいい、この人に会ったらいい』というアドバイスをします」。そう語る柳澤校長先生の元にも、多くの学生が相談に来るそうだ。

こうした開かれた校風だからこそ、勉強にも音楽にも力を入れることが、ごく自然に思えてくる。生活の中に音楽があることが、ごく自然なように。



開成卒業生が出演するKP-1のリサイタルに、角野君など現役生も出演したことがある。



米国のハーバード大学